国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Usage of desu in the Tabloids (koshimbun) in the Beginnings of the Meiji Era

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長崎, 靖子, NAGASAKI, Yasuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002047

『日本語科学』8(2000年10月) 126-140

明治初期小新聞に見る「です」の様相

長崎 靖子
(日本女子大学大学院)

キーワード

助動詞「です」, 小新聞, 小新聞の投書者, 「です」の活用, 「です」の上接語

要 旨

本稿では, 明治初期における助動詞「です」の様相を,『読売新聞』『東京絵入新聞』『仮名読新聞』三紙の小新聞を通して観察した。その結果, 1) 三紙において「です」の用例数に差があるものの, 全体として「です」の用例は少ない。2) 投書者は, 東京では下町在住者が多い。3) 東京在住者に比べ, 横浜在住者に「です」の使用者が多い。4)「です」の活用はまだ貧困である。5) モーダルな表現に続く形が多いことが明らかとなった。

結論として, 明治初期小新聞に見る「です」は,「です」の使用者, 活用, 上接の面に偏りが見られ, この点から当時の「です」は, まだ汎用性に乏しい語であったと考えられる。

1. はじめに

1.1. 本稿のねらい

本稿は, 明治初期新聞の談話体の文章における助動詞「です」の様相を探ることを目的とする。

助動詞「です」が, 江戸末期の戯作者, 山々亭有人の人情本の会話にまとまって見られ, しかもその中では,「丁寧」の意味を有し, 活用も行われて, 現代語に近い用法を持っていたことはすでに指摘されている[1]。そこから, 一般的に, 江戸末期には現代語に近い「です」が, 江戸の一般民[2]の日常会話の中で普及しつつあったと考えられている。しかし, 管見の限りでは, 江戸末期の口語資料においては, 山々亭有人の作品以外に「です」の用例が多数現れる資料は見られない。同時代の仮名垣魯文の作品に見られる「です」の用例も数は少なく,「丁寧」の意味は認められるものの, 活用は終止形のみに止まる。また, 有人の作品に見る「です」のほとんどは狭斜関係に属する人物が使っている用例であり[3], 当時「です」という語が, どのような階層で, またどれほど普及していたかはいまだに不明な点が多い。

本研究では, このような江戸末期の「です」のその後の様相を, 明治初期の新聞の談話体[4]の文章を通して観察し, 当時の「です」の使用者やその普及の程度について考えてみようと思う。

1.2. 研究方法

明治初期の新聞資料を使った研究には, 進藤(1959)があり, その中では, 明治初期の小新聞における談話体の文末調査がなされている[5]。本研究でも, 明治初期の新聞として, 進藤(1959)で扱った『読売新聞』『東京絵入新聞』『仮名読新聞』(以下『読売』『絵入』『仮名読』とする) 三紙の小新

聞を資料とし，その中での「です」の出現率を探ることとする。小新聞を資料としたのは，大新聞に比べ，談話体の文章が多く使用されているという点からである。

小新聞の中で談話体の文章は，主に「新聞（雑報）」欄と「投書（寄書）」欄に見られる。まず，両欄における「です」の用例の出現率を三紙ごとに調査し，それぞれの特徴を「です」の活用・承接を含め観察するが，今回は特に，読者からの便りを寄せた「投書（寄書）」欄で，使用者の出身や階層による差異を調査し，「です」使用者の傾向を探ることに焦点を当てた。もちろん，談話体は一つの文章形態であるので，実際の日常会話との差異は否めないが，投書欄では，地域や職業，階層別の言葉遣いの相違が，ある程度談話体の文章の中に反映されており，当時の話し言葉を探る一つの手がかりとして有効と考え，調査することとした。

1.3. 明治初期小新聞の投書者

実際，明治初期の小新聞の投書欄を眺めると，様々な文末表現を観察することができる。当時の小新聞は，『読売』の創刊号に，「此新ぶん紙は女童のおしへとて爲になる事柄を誰にでも分るやうに書てだす旨趣でござります」とあるように，大新聞がインテリ層中心の読者層であったのに対し，市井の庶民を対象とするものであった。また，小新聞の投書欄に投書する人物も同様に，大新聞の投書家がインテリ層中心だったのに対し，山本(1981)によると「大都市の老舗の商人，熟練技術の職人，幕末からの戯作者など有閑なひとたちであった」という。

小新聞の投書欄を見ていくと，例えば，

○可笑や／＼鈴木田さん私しは大坂生れの者でおますがナ（略）天麩羅の立喰をしなはるが餘り誉た事ではおますまい（略）大坂府　下岡　秀　（読売　M8.7.2）

○日就社さんへ御願申上まする私らは川越在で芋ベヱ食て屁ベヱたれてるおん百姓でござるが初めて東京チウ處へ出かけやして（略）川越在　松山與吾左衞門（読売　M8.9.22）

○僕輩は日就社などの説と同じで何も三絃が悪いといふ訳は決して無いが彼の唄が多く淫事に渡て實に醜体きはまるよ恐るべしサ「君そう論を分ていひ給ふなら僕の別懇にする藝妓の唄ふを一ツ聞たまへ（略）青山百人町鈴木門之助　（読売　M8.10.24）

○昔話しゞやア五イせん此頃のこんで五イすが（略）先生様へ問ますだアわんとした物で五イス　甲州花咲驛　犬飼い老爺　（仮名読　M8.11.19）

のように，出身や身分などで，言葉遣いの違いが観察できる。『読売』のM8.7.2の投書は，「でおます」と言う，投書者の大阪生まれという特徴を表している。M8.9.22の投書では，「芋ベヱ食て」，「東京チウ處」など，川越に住む人物の方言的な言い回しが見られる。『仮名読』のM8.11.19の投書では，甲州方言の「ごいす」という文末表現[6]が現れる。また，『読売』のM8.10.24の投書では，「君」，「給へ」といった書生風の位相的な言い回しが見られる。

もちろん，今日の新聞のように，発行者側で文体に手が入れられる場合もあったとは考えられる。しかし，『読売』の明治８年８月３日の新聞社の投書者へのコメントには，「常陸の國那珂湊の猪瀬さんの投書は至極宜しい事なれど文を其まま出せと有りますが當社の新聞は俗談平話が持まへゆゑやさしく書直してよくば御回答次第に出します此外にもむづかしい投書が來て書直すに

手間取ツて困りますから成たけ話のやうに各位やさしく書て下さりまし」とあり，この記述から，文語調の難しい文章には手を入れているが，一方で，談話調で投書した文章に関しては，ほぼそのまま載せているのではないかということが推測できる。すなわち，『読売』の記者の記事を載せた「新聞」欄の文体に見られない文末表現に関しては，投書者本人のものを生かした可能性が高く，小新聞が婦女子にもわかる平易な文章をモットーとしていたことを考えれば，他の小新聞においても同様の可能性が推測できる。つまり投書欄における様々な文末表現は，投書者本人のものか発行者の手によるものかは明確に判断はできないが，そこには当時の人々が感じたであろう階層や職業などによる話しことばの差異を見ることができると考えられるのである。

ただ，小新聞を扱うということで，自ずと読者層，さらには投書者層も限定されることが予想されるので，すべての階層に対する「です」の使用の度合を明確にすることはできない。今回は，あくまで小新聞が対象とした読者層の中で，「です」の使用者の傾向がどのように見られるのかを調査する。

なお，今回資料としたのは，『読売』『絵入』『仮名読』三紙の，明治８年11月，一月分の新聞である。『読売』『絵入』に関しては，創刊から11月時点までの調査も行っているが，『仮名読』が明治８年11月１日に創刊されており，代表的な小新聞三紙が揃う，最も初期の月という点で，11月を比較対照とした[7]。調査資料として，『読売』は千葉県立中央図書館蔵のマイクロフィルムを，『絵入』は東京大学法学部附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）蔵のマイクロフィルムを，『仮名読』は明石書店刊の『仮名読新聞』〔復刻版〕(1992)を用いた。原則として引用の字体は原本に従ったが，変体仮名に関しては，現今の字体に改めた。

２．小新聞に見る「です」の様相

2.1.『読売』に見る「です」の様相

『読売』は，三紙の中では最も早い明治７年11月２日に創刊されている。同紙の禀告（しらせ）の項には1.3にも記したが，「此新ぶん紙は女童のおしへとて爲になる事柄を誰にでも分るやうに書てだす旨趣でござりますから耳近い有益ことは文と談話のやうに認て御名まへ所がきをしるし投書と偏に願ひます」とあり，『読売』がリテラシーの低い庶民にもわかる振り仮名をふった談話体の文章を目指していたことが知られる。創刊時は隔日の発刊であったが，明治８年11月時点では日刊となっている。ここでは，明治８年11月の新聞，22日分を調査した。

当時の『読売』の主な内容は，「官令（おふれ）」「新聞（しんぶん）」「寄書（よせぶみ）」の三つの項目からなっていた。その中で，「官令（おふれ）」の項は候文体が使用されており，談話体の文章からははずれる。談話体の文章は「新聞」「寄書」の項目に見られる。

2.1.1.『読売』の「新聞」欄に見る「です」

『読売』の「新聞」の項目は，常体と丁寧体の二つの形が見られる。丁寧体では，「でござります」「であります」の文体を基調としており，11月の「新聞」欄では，「です」の用例は見られなかった。さらに，創刊から明治８年11月分まで調べたところ，「です」が使用された例は，明治８

年10月19日の投書に対する，編集長の鈴木田正雄のコメントの中にある

（略）高畠先生お互ひに責られる身はつらひものですねエ

という文章の１例のみであった。記者が書く記事の欄では，丁寧体では，「でございます」や「であります」を用いており，それが『読売』の方針であったのではないかと考えられる。

2.1.2.『読売』の「寄書」欄に見る「です」

「寄書」の項目も，丁寧体と常体の両者とも見られる。丁寧体の文では，「であります」「でございます」の表現が圧倒的に多いが，その中で，「です」文が，11月12日，11月27日，11月29日の３件に掲載されている。用例は次の通りである。

○私は新富町に住んで居る轉びやの戸棚に同居しております枕紙でございます（略）何だか珍聞漢文の寐言に一夫一婦だとか醜体極まるとか嶋原ことがるとかいツて三朱のものを十五銭ぐらゐおいてお歸りですがねエ（略）　新富町まくらや内おかみ（11.12）

○鳥渡お向ふのお松どんお前さんの髪は大そう汚れて居ますねエお洗ひなさらないの「ハイ私はこちらへ御奉公に來てからまだ七十五日たゝないから其内は洗ことはならないと女房さんがおツしヤいますから洗ひませんは「へイなぜですねエ「なぜだか縁が薄くなりますとサ（略）　神田美土代町耕敬辰（11.27）

○お金さんあなたの御家へも確か牛の乳を毎朝持て來ますねエ「ハイ御母さんが身弱もんですから毎あさのみますは「へエ私の御父さんも毎日飲ますがね近頃は水と交ぜて來るから薄くツてお藥にはならず却ツてお腹を下していけませんとねエ「あなたでもそうですか私の御母さんも誠に薄くツていけないなんでも牛にお魚をやらない所爲だらうと申しますよ「オヤ牛でもお魚をたべないと乳が出ないのですかねエ（略）　芝濱松町八百屋（11.29）

11月12日の「新富町まくらや内おかみ」は「枕紙」の「紙」と「おかみ」をかけたのであろう。「轉びや」とは，「轉び芸者」，つまり体を売る芸者の世話をする店である。投書の書き方やその内容から，この投書者はおそらくは狭斜関係の人物，あるいは滑稽味を帯びた内容から，狭斜に精通している戯作者ではないかと推測される。いずれにしろ，「轉びやのおかみ」が投書したという設定で「です」が使用されている。11月27日の投書は，「神田美土代町耕敬辰」が向かいの女中と会話している場面を，投書の中に取り入れたものである。両者の言葉遣いから，投書者も店の奉公人という立場ではないかと考えられる。11月29日の投書者は「芝濱松町八百屋」とあり，下町の住人と考えられる。投書はやはり会話形式となっている。この３件の記事からは，投書者が下町の住人で，階層の低い人物というくくりができる。しかし，この３件のみでは用例があまりにも少ないので，さらに創刊から明治８年11月までの用例を採取し分析した。

『読売』の中で「です」文が最初に登場するのは，明治８年１月31日の「寄書」欄である。

○私は横濱の東隅に住む者で有ますが（略）横濱は土地が狭いにしては邏卒の人員は澤山ある様ですが緊要の場所にいつも見えませんが此處などにはどうか一人ヅツ居る様にいたしたいものです（略）　横濱石川町地藏坂に住　古和井琴太郎（1.31）

横浜の人力車の車夫が乗車を強要して困るので，邏卒（現在の警邏の巡査）を増やしてほしいと

いう内容である。投書者は「横濱石川町地藏坂に住　古和井琴太郎」とある。この名前は，「こわいこと」という内容にかけてあると思われるので，本名ではないだろうが，横浜在住であることは間違いないようである。その他，明治８年11月までの新聞で「です」文は，明治８年２月５日（飯倉磨美屈中山某），３月19日（生綿並綿職家業總代　河内屋某他），４月12日（向水成），５月７日（第一大苦士農工商　畫者間賀内），５月22日（川瀬石町の　小わか　小さだ），６月４日（本所三の橋詰屯人力曳），６月10日（與程野呂松），６月12日（八王子住三太郎），７月24日（琴平町山口五郎），８月４日（下谷住清水清），８月８日（藤屋きん），８月25日（坂本町　辻六右衛門），９月２日（浅草馬道　鈴木德藏），10月22日（轉々堂主人藍泉）の「寄書」に見られるものと，先にあげた３件の用例のみである。つまり，『読売』においては「です」文は，創刊から明治８年11月までの新聞の中で，記者が書いた欄の１件，投書欄の18件，計19件の記事にしか見られず，「です」の出現率はかなり少ないといえよう。

これらの投書者のうち，11月の新聞の３人の投書者と，「屯人力曳」「清水清」「鈴木德藏」は，住所から下町の居住とわかる。「轉々堂主人藍泉」こと高畠藍泉も下谷生まれ，「古和井琴太郎」「河内屋某他」「向水成」「三太郎」は，住所や話の内容から江戸以外の出身と知られる。また，投書者の職業ははっきりしない者が多いが，「古和井琴太郎（こわいことたろう）」「向水成（むこうみずなり）」「畫者間賀内（ひるはまがないか？）」「與程野呂松（よほどのろまつ）」等の名前からは，戯作者的な人物像が窺われる。その他，「八王子住三太郎」の投書は，茶屋の座敷の会話を写した内容のもの，「琴平町山口五郎」の投書は，落語調の会話を写したものである。「川瀬石町の小わか　小さだ」は芸者で，投書は編集長の鈴木田正雄に対して話しかける調子で書かれている。これらの「です」には，後に，接続詞，終助詞が続くものが多い。

「です」の用例を活用，上接の点から見ると，２月５日，８月４日の「でした」の用例以外は，すべて終止形である。さらに現代語のように形容詞や形容動詞に続くものは見られなかった。こういった点から，まず，『読売』に見る「です」をまとめると，

①「です」を使用する投書者は，東京の下町の住人，あるいは地方出身者である。

②戯作調の内容に見られる。

③会話を写したものに多く見られ，「です」の後に，接続詞や終助詞が続くものが多い。

④終止形以外の用例は，創刊から明治８年11月までで２例のみである。

⑤形容詞等の活用語に続く形，また形容動詞に続く形は見られない。

という点が上げられる。

2.2.『絵入』に見る「です」の様相

『絵入』は，『東京日日新聞』の小新聞として明治８年４月17日に創刊された。創刊時は，『平仮名絵入新聞』という名前で，隔日の発刊であったが，明治８年11月時点では，『東京平仮名絵入新聞』と名前を変え，日刊となっていた。翌年３月にはさらに，『東京絵入新聞』と改題されている。『近世列傳躰小説史』下巻（明治30年刊　坪内逍遥・水谷不倒著）の「假仮垣魯文」（野崎左文著）の中で，「『讀賣』は眞面目（まじめ）にして親切，『繪入』は華麗（けで）にして愛嬌あり而して『假名讀』は洒落にし

て輕妙」(p.357～358) と記されるように,『絵入』は,落合芳幾の挿絵入りで,艶のある内容が特徴であった。

『絵入』の主な内容は,「公開 (おふれ)」「雑報 (はなし)」「投書 (なげぶみ)」であるが,その他,時に「心の栞」「諭言 (さとし)」「假名かき新報」といった項目も見られ,他の二紙に比べると投書欄の紙面が少ない。『絵入』も11月の一月,22日分の「雑報」「投書」の項目を調査した。なお『絵入』の11月７日,11月13日の新聞には欠損部分がある。

2.2.1.『絵入』の「雑報」欄に見る「です」

『絵入』の「雑報」の項目は,『読売』に比べると,「なり」「たり」といった文語調の文章も見られるが,やはり談話体が主流である。常体,丁寧体がともに使用されており,この中で「です」が使用された例は,11月８日,11月13日,11月17日の記事に見られる。

○浅草の修善院の地内の春米屋朝妻八百吉のみせへ町人躰の人がきて (略) そのうちには婆さんがひとりゐてソリヤア間違ではありませんか私のとこでは米をさういひはしませんがといひたれども旦那が代をおつかはしですからマア置て參りませう (略) (11.8)

○今日は鬱陶しいお天氣でございますさやうさこの降りにおとなりの鐵五郎さんはけさがた稼にでられましたが平次郎さんはまだ起ないやうす (略) 御苦勞さま何もしさいもありますまいがお壹人ですからへイ／＼何事がございましてものがれられない (略) (11.13)

○ある華族さまだか士族さんだかゞ支度料五拾圓月給は十圓で周旋料も相當に出さうから權妻の周旋をして吳ろと出入の者へ御頼なすつた所が其出入の人の近傍に名を花といつて年は十八ばかりに成る別品が有たさうです (略) (11.17)

11月８日の話の内容は,米の注文を受け,配達に言った際の行き違いを記事にしたもの,11月13日の記事は,隣の住人が起きてこないので,心配して戸を壊して入ったら首をくくっていたという内容である。この記事は,後半の部分が欠損しているので,記事全体の内容,またこのあとに「です」が使用されていたかどうかも不明である。８日,13日の記事の「です」は,いずれも後に接続詞の「から」が続き,会話文の中で使用されている。11月17日の記事は,妾の世話に関する顛末を語ったものであるが,これは地の文に使用されている。

2.2.2.『絵入』の「投書」欄に見る「です」

「投書」の中で,「です」が使用されているのは,『読売』に比べると多く,11件の投書の中に用例が見られる。

○或る御神さんが産をしましたところが (略) 此子は右が寐勝手だとか何んだとかいひまして右を下に斗りねかした物ですから又あたまが左の方へまがりました (略) 精神といふ物はあたまに有る物ですから (略) 世間の子どもは残らず丸くなでそだてゝやりたい物です (略)

通三丁目高島屋寓塘雨散人 (11.2)

○鳥渡和橋さんお聞申すがあなたはどういふ譯で此号をお付なさるの「さやうでございます日本橋邊が出生ゆゑつけます「夫なら出生の地名をつけるもんですかな (略)「ソンなら咄し家

の柳橋は柳ばしで生れたのですか（略）　　通貳丁目　前島和橋（11.13）

○浅草田原町の牧野さんの御娘子おあぐさんに申上ます繪入新聞百二十四号にあなたは壽町の何という私學校へお通ひなされ大さう御勉强なさるさうですが（略）

第一中學區一番小學坂本學校の生徒高階尚女高橋きよ女山口やす女（11.17）

○（略）随分おめにかゝるお學者の大先生や立派な士族さまやなにかですとサ（略）徳川さまの時のことばかりこひしいやうでしたが（略）皆こまる所からつひこんな悲しい商賣もするきになるのですから（略）　　新富町裏長屋のはき溜の隅の　つる女（11.19）

○（略）髭や顔を剃のは髪剃一本で出來ますから油元結の價だけ安くするやうに組合なり仲間なり一同申合せては如何でせうねへ府下の髪結さんたち　　音羽町寄留　断髪貧人（11.30）

この５例の他，11月12日（下谷　程田努），11月15日（麻布永坂町三十七番地　杉田玄端），11月17日（南新二），11月18日（したや寄留程田はま女），11月20日（飯台琴田性），11月27日（通三丁目　前島和橋）に，「です」の用例が見られる。投書者の中で，「高島屋寓塘雨散人」「前島和橋」「南新二」は，小新聞の投書の常連であったらしい。土屋(1992a)によると，「高島屋塘雨」本名「野田千秋」は，もとは武士で，投書当時の職業は「官吏，文筆業」，「前島和橋」本名「前島柳之助」は，職人で，投書当時の職業は「画工，絵草子屋」，「南新二」本名「谷村要助」は，幕臣で，投書当時の職業は「通運会社社員」であったという。他の投書者の職業は定かではないが，住所から『読売』の投書者と同様，下町在住者が多いことがわかる。

投書の内容については，戯作調のものも見られるが，「第一中學區一番小學坂本學校の生徒」のように勉強をする娘を励ます投書や，「杉田玄端」の船酔いの薬を紹介する投書など，道徳的な内容の投書にも「です」の使用が見られる。また，『読売』では，会話調の文に「です」の用例が目立つのに対し，『絵入』では，地の文にも「です」が使用されている。

「です」の活用に関しては，終止形の他，11月19日に「でした」，11月30日に「でせう」が見られる。11月19日の「つる女」は，内容から「轉び芸者」と考えられる。11月30日の「断髪貧人」の身分や職業は明らかではない。住所も「音羽町寄留」とあり，生まれながらの東京人であるかどうかも定かではない。また，『絵入』にも，調査範囲の用例では，現代語のように形容詞に続く「です」は見られなかった。以上から，『絵入』の「です」をまとめると，

①「です」を使用する投書者は，東京の下町の住人が多い。

②一般的な内容にも使用される。

③『絵入』の「です」の用例も，接続詞や終助詞が下接する会話調の文に用例が多く見られるが，この他，地の文にも使用が見られる。

④終止形の「です」の他，「でした」「でせう」の用例が２例見られる。

⑤形容詞等の活用語に続く形はない。形容動詞に続く形は１例見られる。

という点があげられる。投書者が東京の下町の住人が多い点，終止形以外の使用があまり見られない点，活用語に続かない点は『読売』と同じであるが，一般的な内容や地の文にも使用されている点は『読売』とは異なり，『絵入』の読者層のより幅広い「です」の使用の様子が窺われる。

2.3.『仮名読』に見る「です」の様相

『仮名読』は，横浜毎日新聞の姉妹版として，当時横浜毎日新聞の雑報記者をしていた戯作者仮名垣魯文を中心に，明治８年11月１日に横浜で創刊された。横浜毎日新聞の明治８年11月１日には，「東西／＼發兌の三番叟より五評判に預かり升た讀賣と平假名の兩新聞の中間を行き鵜の真似をするからす飛も毎日新聞の元祖の本社開業以來のお得意を外へはやらじとすゞりをならし曲りなりにも假名釘流お邪魔にのたくる蚯蚓書彌々今月今日より隔日毎に出刷升ればとつぱ一偏にお購求をねがひ升」という広告[8]が見られ，発刊時は隔日発刊であったことが知られる。『仮名読』は，11月の15日分の新聞の調査をした。

2.3.1.『仮名読』の「新聞」欄に見る「です」

『仮名読』の「新聞」欄で，「です」が使用された記事の件数は44件である。『読売』『絵入』に用例がほとんどなく，しかも日刊であったのに対し，当時の『仮名読』が隔日であったことを考えれば，「新聞」欄での「です」の使用度は他の二紙に比べ，圧倒的に高いことが知られよう。

○猿若町一丁目の尾上菊五郎が住ていた内へ毎晩幽霊が出るという評判で有升たが其家を二級判事補の池田さんがお買受になりて日數が立てもヒウともドロともいはず怪くも怖しくもないそうです（略）(11.1)

○横濱本町通り六十八番舘にて頃日繪芝居が掛りましたが（略）會芳樓で毎晩午後六時興行ますそして日本人が傍から繪解をして聞かせます餘程手際なもんですヨ (11.2)

○(略) 又報知新聞に出た下谷數寄屋町の藝妓蔦吉さんも新聞好でよい心懸の人だそうです横濱の藝者衆も頓てよい評判がありそうなもんですネー姉さん (11.9)

『仮名読』の11月の「新聞」欄に見られる「です」は，そのすべてが終止形である。用例の中には終助詞が続き，読者に語りかける調子で書かれているものも見られる。形容詞等の活用語に続く形，形容動詞に続く形は見られない。

2.3.2.『仮名読』の「寄書」欄に見る「です」

「寄書」欄には17件の記事の中に「です」の用例が見られる。

○(略) おまはん方はモウ猫退治も大体秋の夜でありそうなものでスに（略）米山程うらみは積ツてゐるのでス（略）學校へお金をあげたのでスとサ（略）河竹に浮名を流す身の上でスから（略）そこは讀と歌澤でスから（略）　東京生れの旅藝者　當時横濱寄留根子屋小はん (11.1)

○神奈垣さんお發兌でお繁机いのに馬鹿氣たことを窺ひ升が（略）犬張子の代りに張子の虎に致しては如何でせう（略）　青木快吉 (11.2)

○何日も貴社の毎日しんぶんには西洋人とさへ見れば髯的だの隆鼻奴だのと滅多やたらにおこなしなさるけれど（略）此お方は行儀がよいはづです（略）夫だからかよふにすぐれて行儀がよろしふ御ざりますとの御はなしでした　横濱　毛利ゆふ (11.11)

○先日高嶋町の黴毒病院の前を通りますと門の左の夢相窓の側に男が一個立て居て中の女（大方娼妓の病人でせう）と互ひに大聲で話して居るから（略）　横濱　姫松甚助 (11.19)

○夫婦喧嘩は犬も喰はない家内和合は福の神のお祭りと申しますからどうか夫婦中はよくしたいものですが（略）外國の人に對し誠に面目ないやら悔しいやらでホンニ他事には思ひませんでした（略）　本町四木村小次（11.27）

この他，「です」の使用された投書は，11月２日「東京日本橋通三丁目　前島和橋」，11月５日「日本橋釘店　太田文次郎」，「當港辨天通　中村内鍋女」，「高嶋町猫ちか」，「横濱本町六丁目　植田勝次郎」，11月７日「東京吉原町貸坐敷のおいらん」，11月９日「元町民家坊太郎」，11月19日「三泣車の猿松」11月21日「商舘小遣」，「観世音吉」，11月24日「當港樺太小池半海」，11月27日「京橋　三泣車猿松」に見られる。ここで，目立つのが，「です」使用者に横浜在住者が多い点である。もちろん，『仮名読』は，横浜で創刊されたため，横浜在住の投書者が他の二紙より多いことは確かである。しかし，のちに**表２**に示すように，11月の投書件数62件の内，31件が東京在住者のもの，24件が横浜在住者のものであるのに対し，「です」使用者は，東京在５件，横浜在10件となっており，この割合を考えると「です」の使用者が，横浜在住者に多いということがいえよう。また，東京在住の５件の用例に関しては，その使用者を見ると，下町在住者や狭斜の人間であり，この点は他の二紙と同様である。なお，「です」を活用の面から見ると，「でした」「でせう」が見られる他，「ませんでした」の形も１例確認された。

以上から，『仮名読』の「です」をまとめると，

①「新聞」欄にも数多くの「です」の使用が見られる。終助詞が続くような会話的な文に見られる他，地の文にも積極的に使用されている。

②「です」を使用する投書者は横浜在住者の割合が高く，東京在住者では下町の住人に目立つ。

③「寄書」欄では，「でした」「でせう」「ませんでした」の形が見られる。

④動詞，形容詞に続く形は見られない。形容動詞は２例見られる。

という点があげられる。「新聞」欄の地の文に「です」を一般的に使用し，文章語として活用している点は，他の二紙と大きく異なる。ただし，その場合の「です」は，終止形のみである。「寄書」欄では，「です」の活用語が見られ，また，他の二紙に用例のなかった「ませんでした」が見られることも特徴的である。

使用者の面からは，先にあげたように，横浜在住者に「です」使用が多い点が注目されるが，この点は，次の「**３．三紙にみる「です」の比較**」の項目で詳しく述べていくこととする。

３．三紙にみる「です」の比較

3.1.「です」出現記事件数の比較

これまで，『読売』『絵入』『仮名読』の11月の新聞に見られる「です」に関して，個々に分析してきたが，次に「です」の出現件数，「です」の使用者等に関して，三紙全体から比較していくこととする。まず，三紙に見る「です」の出現件数を，「新聞（雑報）」欄，「投書（寄書）」欄別にまとめると，**表１**のようになる。

まず，11月の三紙の「新聞」欄での「です」の出現件数を比べると，『仮名読』が圧倒的に多いことが知られる。『読売』は新聞欄には「です」の使用はない。『絵入』の新聞欄には３例見られ

表１　明治８年11月の三紙に見る「です」の出現記事件数

	新聞日数	新聞（雑報）欄			投書（寄書）欄		
		です入記事件数	記事件数	%	です入投書件数	投書件数	%
読　売	22	0	318	0	3	103	2.9
絵　入	22	3	256	1.2	12	60	20.0
仮名読	15	44	170	25.9	17	62	27.4

るが，そのうちの２例は会話を写した中に見られるものであり，地の文に使用されたものは１例のみである。このことから，『読売』『絵入』においては，この時期，新聞社側の書く談話体の文章では，「です」の使用は一般化されていなかったことがわかる。『仮名読』が「です」を一般的に使用しているのは，おそらく編集者仮名垣魯文の方針と考えられるが，魯文自身の戯作ではさほど「です」を使用している作品はなく[9]，その訳は明確ではない。他の二紙と異なるのは，『読売』『絵入』が東京で発行されているのに対し，『仮名読』は，横浜で発行されている点であり，あるいは地域的な関係があったのかもしれない。

投書欄でも，『仮名読』が最も「です」の用例が多いが，『絵入』も「新聞（雑報）」欄に比べると，『仮名読』にせまる勢いで「です」の用例が見られる。これは『読売』と，『絵入』『仮名読』の読者層の相違ではないかと考えられる。土屋(1992a)では，読売の投書者の中に日米通商条約に調印した時の老中（間部詮勝）や，政府の書記官となった岡本長之がいることなどをあげ，「特に『読売』にはかなりの知識人が登場し，他紙よりその割合は高かったと思われる」と指摘している。この点から，『読売』が他の二紙とは異なり，かなりの知識階級も読者に含んでいたことが窺われ，これが投書者の言葉遣いにおいても差異を生み出していると推測される。

3.2.「です」の使用者の比較

さて，次に投書者の居住地から，「です」使用者を観察していくこととする。**表２**は，『読売』『絵入』『仮名読』三紙の投書者の居住地を区分したものである。表の中で他地域とは，東京，横浜以外の居住者，不明は住所が書かれていない者である。

表２　明治８年11月の三紙に見る投書者の居住地　※（　）内は「です」使用者

	投書件数	居住地			
		東　京	横　浜	他地域	不　明
読　売	103	69 (3)	2 (0)	12(0)	20(0)
絵　入	60	44(10)	1 (0)	2(0)	13(2)
仮名読	62	31(5)	24(10)	4(0)	3(2)

11月の『読売』は，「です」を使用する投書者のすべてが，東京の下町に居住している人物であ

る。しかし，2.1.『読売』に見る「です」の様相で示したように，創刊から11月までを調査してみると，『読売』の「です」の使用者は，地方人もかなり見られるという特徴がある。『絵入』は，東京以外の投書者が３人のみ（不明を除く）なので，東京と，他地域との比較をするのは困難である。東京在住の「です」使用者は『読売』同様，やはり下町在住者が多い。『仮名読』は，11月の投書件数62件の内，31件が東京在住者のもの，24件が横浜在住者のものであるのに対し，「です」使用者は，東京在５件，横浜在10件となっている。つまり，東京在住者の中で16.1%が，「です」を使用しているのに対し，横浜在住者の中では41.7%が「です」を使用している。この割合から，『仮名読』の用例を見る限りでは「です」の使用者が横浜在住者に多いということがいえよう。東京在住の５件の「です」使用者は，下町在住者や狭斜の人間であり，この点は他の二紙と同様である。

3.3.「です」の活用，上接語の比較

最後に三紙における「です」の活用，上接語の比較を行う。

3.3.1.「です」の活用

まず，活用に関しては，『読売』は「でした」(11月以外の寄書欄の記事　2.1参照)，『絵入』『仮名読』は，「でした」「でせう」の活用が見られた。但し，**表３**に示すように，終止形以外の活用形はすべて投書欄に見られるものであり，記者の書く新聞欄では，活用形は見られなかった。特に『仮名読』は，44件の記事の中に52例の「です」が見られるが，そのすべては終止形であった。また，投書欄の『読売』３件（５例），『絵入』12件（16例），『仮名読』17件（33例）の中でも，終止形の「です」以外の用例は６例のみであった。

表３　明治８年11月の三紙に見られる「です」の活用　※(　) 内は「ませんでした」

	新聞日数	新聞（雑報）欄				投書（寄書）欄			
		総数	です	でせう	でした	総数	です	でせう	でした
読　売	22	0	0	0	0	5	5	0	0
絵　入	22	3	3	0	0	16	14	1	1
仮名読	15	52	52	0	0	33	29	2	1(1)

3.3.2.「です」の上接語

「です」の上接語に関しては，普通名詞に続くもの，形容動詞の丁寧形，「もの」「こと」「はず」のような形式名詞に続くもの，準体助詞「の」に続くもの，「お～だ」や伝聞の助動詞「そうだ」，様態を示す助動詞「ようだ」の丁寧形として使われるもの，「ません」に続くものに分け，また，「なぜ」「いかが」「どう」「さよう」「そう」等は「その他」に入れて**表４**に示した。

普通名詞に続く「です」，また，形容動詞の丁寧形としての「です」は全体で24例である。これ

表４　明治８年11月の三紙に見られる「です」の上接語

	新聞日数	普名	形動	もの	こと	はず	の	そう	よう	お～	ません	その他	です総数
読　売	22	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	2	5
絵　入	22	2	1	5	0	0	2	4	1	1	0	3	19
仮名読	15	19	2	10	4	1	6	39	0	1	1	2	85

に対し，「もの」「こと」「はず」のような形式名詞，準体助詞「の」に続く「です」や，助動詞「そうだ」「ようだ」の丁寧形といういわゆるモーダルな表現に表れる「です」は全体で74例見られる。特に目立つのが「そうだ」の丁寧形で，全体の39.4%を占めている。「そうです」の用例のほとんどは新聞欄のものなので，新聞記事という性格による伝聞表現への偏りはあろうが，これらの数値から，モーダルな表現に「です」が多く表れるという傾向が窺われる。

活用語に続く形としては，三紙とも，現代語のように形容詞に続く形は見られなかったが，『仮名読』に「ませんでした」の形が１例見られた。『読売』『絵入』では，「ませんでした」の形はなく，次に示すように「ましなんだ」「ませんだつた」の形が使用されている。なお『仮名読』でも「ませんでした」とともに「ませなんだ」の形が見られた。『絵入』のM8.11.17の「雑報」欄の記事では，同じ文章中に「です」が使用されていながら，「ませんでした」ではなく，「ましなんだ」が使われており，過渡期的な様子が窺われる。

○むかし日本への獅子の渡ツた事がありましたそうだ（略）どうも書方が虚だから何を書ても艸折帖か戸板 穽に掛ツた鼠のやうに眞平で少しも脹みのあるものはござりませんだツたが（略）（読売　M8.8.28　寄書　深川住横川清治）

○(略) 私の旦 印は少し倹約の横町へ這入つた人で疾から讀賣か繪入新聞を買つて貰ゐたいと度々願ひますけれども彼は無駄なものとばかり云はれて頓と聞入て呉ませなんだが（略）（仮名読　M8.11.13　寄書　丁稚猿松）

○ある華族さまだか士族さんだかゞ支度料五拾圓月給は十圓で周旋料も相當に出さうから權妻の周旋をして呉ろと出入の者へ御頼なすつた所が其出入の人の近傍に名を花といつて年は十八ばかりに成る別品が有たさうです（略）十〇で神樂も舞ひをさまりましたとをかしい咄しをしながら行た人のあとから探訪者がついて聞てきましたがをしいことに其人の名まへをはなしましなんだトサ（絵入　M8.11.17　雑報）

3.3. まとめ

さて，明治８年11月の小新聞三紙において，「です」がどのような状況にあったかを比較してきたが，当時の三紙においては，「です」の出現状況がかなり異なることがわかった。まず，新聞欄では『仮名読』は積極的に「です」を使用しているが，一方『読売』『絵入』では，「です」はほとんど使用されていなかった。

投書欄における「です」では，『読売』と他の二紙で出現数にかなり差異が見られた。これは先

にも述べたが，三紙の読者層或いは投書者層の差異によるものと考えられる。投書者の居住地や職業に関しては，東京では下町在住者が多く，また狭斜関係の人物の投書に「です」の用例が見られるのは三紙に共通していた。さらに『仮名読』の用例は，「です」使用者が横浜在住者に多いことを示しており，「です」の使用者の地域，あるいは階層を考える上で重要な示唆を与えている[10]。

全体としては，三紙の小新聞に現れる「です」の量はあまり多いとはいえない。しかし，会話調の文に多く見られる点や，接続詞や終助詞が下接するものがかなりあることを考えると，当時の実際の口頭語においては，新聞に見るより使用される場面が多かったのではないかという可能性が推測できる。

「です」の活用，上接語に関しては，まず活用面では終止形以外の活用があまり見られず，活用語のバラエティーがまだ貧困であることがわかった。上接語の面では，モーダルな表現に多く表れる傾向があること，現代語のように形容詞に続く形が見られないことが確認された。また「ませんでした」に関しては，「ませんだつた」「ませ（し）なんだ」と併存し，ゆれている時期であること，『絵入』のM.8.11.17の記事に見られるように「です」を使用しながら，「ましなんだ」を使用しているという点で，「です」と「ませんでした」の浸透の時間差を窺うことができた。

4．おわりに

以上のように，明治８年11月の三紙の小新聞における「です」の使用状況を中心に分析し，「です」の使用者，活用，上接の面で偏りが見られる点を指摘した。が，小新聞における調査は，先にも述べたようにあくまで談話体という一つの文章形態の中での「です」を探るものなので，当時の実際の口頭語の使用状況がどの程度反映されているかは，同時代の会話資料と比較しないと明確にできない。

今後は，同時代の口頭語の資料である様々な洋学会話書に見られる「です」[11]の状況との比較等により，今回の調査が，当時の談話体という文章形態としての「です」の一つの状況であるのか，当時の口頭語としての「です」の状況を反映したものであるのか，その意味を明らかにし，明治初期における「です」の様相を，さらに多面的に分析していくことを課題としたい。

注

1　小島俊夫(1959)，辻村敏樹(1959)，松村明(1990)等。

2　「江戸の一般民」という定義は，拙稿(2000)で「他国出身者を除くほか，芸人や芸者，遊女，その他幇間や箱廻しなど，狭斜で働く人物以外」と規定したのに準じた。

3　注２の拙稿(2000)の調査による。

4　この呼び名は，進藤(1959)（研究の詳細については注５参照）での使用に準じた。

5　進藤(1959)では，明治初期に発刊された読売新聞，東京絵入新聞，仮名読新聞（以下『読売』『絵入』『仮名読』とする）の三紙の小新聞の文末表現の調査を行っている。これは，三紙の明治10年２月から３月までの７日分の記事を無作為に選んで，その文末を調査したもので，それによると，文末に「です」体が使用された例は，『読売』では調査文数294文中には見られず，『絵入』では調査文数177文中７文，『仮名読』では，調査文数371文中７文であったとしている。進藤は，この調

査の中で，「です」に終止形以外の活用形が表れていることを指摘し，「文章の用語として登場しているところに，丁寧体としての現代的用法が見られる」と述べている。

6　藤原(1979)では丁寧表現法の方言の一つとして「ゴイス」をあげているが，その中に「中部地方では，いま一つ，山梨県下で「ゴイス」ことばのさかんなのが注目される」とある。

7　資料を統計的に扱う点では『仮名読』が日刊となる明治９年９月を取り上げるべきであったが，のちに明治初年の洋学会話書（『会話篇』明治６年刊等）における「です」の様相と比較することを考え，今回はできるだけこれらの洋学会話書と時期の近いものとして，明治８年11月を資料とした。但し，注10に記すように，明治９年９月の三紙も参考として調査している。

8　この広告が最初に載ったのは土屋(1992b)によると，明治８年10月15日の横浜毎日新聞である。

9　注２の拙稿(2000)の調査による。

10　これらの相違が，先に述べたように地域的な関係があるのか，読者層を考えた編集者の方針であるのかを探るため，『仮名読』が日刊となる明治９年９月の三紙についても数値調査を行った。

その結果，「新聞」欄では，『読売』（26日分）が記事件数633件中１件，『絵入』（二日分欠損があり，24日分）が359件中42件，『仮名読』（26日分）が435件中17件であった。明治８年11月と比較すると，『読売』にほとんど「です」の用例がないのは同じであるが，『仮名読』と，『絵入』とでは，数値が逆転し，『絵入』に「です」が多く使用されていることがわかった。『絵入』は，明治８年12月に編集長が高畠藍泉から前島和橘になった。さらに明治９年９月時点では，編集長は前田健次郎であり，トップの交代がはげしく，これにより「新聞」欄の言葉遣いに変化が見られるのではないかと推測される。

また，「投書」欄の「です」使用者は，『読売』が記事件数103件中４件，『絵入』が60件中17件，『仮名読』が94件中17件で，数値より明治８年11月と同様，やはり『読売』と，『絵入』『仮名読』の投書者との相違が窺われた。さらに明治９年９月の『仮名読』でも投書者の中で，「です」を使用する人物に横浜の在住者の割合が多いことが見られた。この明治９年９月の三紙の「です」の用例に関しては，今後，さらに用例の内容について細かく分析していく予定である。

11　洋学会話書における「です」の研究は松村(1970, 1990)などが著名であるが，今後はこれらの研究を踏まえ，同時期との新聞資料との比較から，明治初期の「です」の様相を探っていきたいと考えている。

参考文献

小島 俊夫（1959）「後期江戸語における「デス」・「デアリマス」・「マセンデシタ」」『国語学』39集　武蔵野書院（『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院　1974，1998新装版所収）

進藤 咲子（1959）「明治初期の小新聞にあらわれた談話体の文章」『国立国語研究所論集１　ことばの研究』秀英出版（『明治時代語の研究―語彙と文章―』明治書院 1971所収）

辻村 敏樹（1959）「近世後期の待遇表現」『国語と国文学』至文堂（『敬語の史的研究』東京堂出版 1968所収）

土屋 礼子（1992a）「明治初期小新聞にみる投書とコミュニケーション」『新聞学評論』41 日本マス・コミュニケーション学会

――――（1992b）「復刻『仮名読新聞』解説」『仮名読新聞』〔復刻版〕明石書店

長崎 靖子（2000）「江戸後期口語資料に見る「です」の意味―その使い手と語感を通して―」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第６号　日本女子大学

藤原 与一（1979）『昭和日本語方言の総合的研究第二巻　方言敬語法の研究 続篇』春陽堂書店

松村 明（1970）『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂出版
――――（1990）「明治初年の洋学会話書における助動詞「です」とその用法」『近代語研究』第８集　武蔵野書院
山本 武利（1981）『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局

（投稿受理日：2000年２月12日）

長崎　靖子（ながさき やすこ）
日本女子大学大学院文学研究科
276-0003　千葉県八千代市大学町 3-20-7